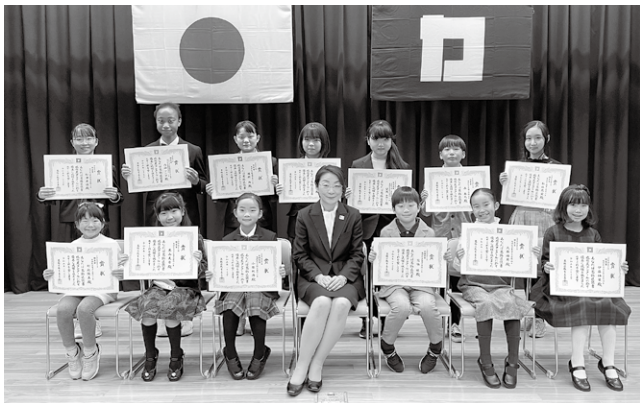

▲1月13日に表彰式が行われました

# 生きる意味

書名　「余命10年」
著者　小坂　流加

大道中学校　二年　小熊　紗由

「生きる意味」とは何だろう。この本を読みながら、そんな疑問がふくらんでいった。

普通に暮らしていたらこんな哲学のようなことはまず考えないし、それを私たち中学生が考えるというのも少し難しい気がする。だが、きっと大人でもわからないまま、気にもしないで生きているという人はいるだろう。

しかし、人はどうしても他人と比べてしまう生き物だ。生きる意味なんてわからないくせに、自分の生き方が他人より優れているとか、劣っているとかを気にしだす。そして少しでも周りと違っていたり、離れていると不安になる。それは少なからず自分の生き方の価値、言い方を変えると人生の価値を、無意識に他人と比較しているからではないか。

では「人生の価値」とは何で決まるのだろう。生きた長さ？生涯で何を残せたか？結婚して子供を残すこと、仕事で立派な事業を成すこと…など、形は様々だが、私たちが無意識に描いている価値のある人生とはこういうものだろう。また、人生で何かを残すには時間が大切になるというのも事実だ。

「あと10年しか生きられないとしたら、あなたは何をしますか。」

主人公の茉莉は、二十歳で難病にかかり、「余命10年」と宣告される。外に出て歩くなど日常生活は送ることができるが、就職して働くということはできない。耐え難い発作、おびただしい量の薬。悪くなるばかりの顔色。はじめの二年半の入院でゆっくりと自分が「病人」へと変貌していくのを感じて、茉莉は恐怖を覚えた。大学も中退。もう、周りの皆と同じ軌道からは外れてしまったのだと、絶望と不安に襲われた。

私ならどうするだろう。全く思いつかなかった。それは私が未来がくること、十年後、二十年後の将来があることを当たり前だと思っていたからだ。今私は高校受験のために勉強を頑張っている。それは入りたい高校へ入るためというのはもちろんだが、その先、行きたい大学へ行くこと、就職して、自立した大人になること、それが最終目標だからだ。その未来が、なくなってしまったら。今みたいに勉強ばかり頑張る必要があるだろうか。勉強することが前提で得られる未来がないなら、もっと他のことがしたい。友達を、家族を大切にしたい。部活を頑張りたい。遊んだり、皆で一つの目標へ向かって切磋琢磨したい。でも、どうせ十年後別れるなら、それも必要ない？人生での目標がなくなること、きっとそれは漠然と捉えていた生きる意味を見失うことなのだ。しばらく考えた後、私はそう思った。

茉莉は長く生きられなかった。何かを残すには、奪われた時間も体力も大きすぎた。では茉莉に人生の価値はなかったのか。悩んで迷って、それでも必死に生きた彼女に生きる意味はなかったのか。私はそうは思わない。

茉莉はわかっていた。いつか全部できなくなることを。立ち上がって歩くこと、季節の移ろいを肌で感じること、些細なことで幸せを感じること、そういう全てを失って、ただベッドの上で横たわっているという時間が来てしまうことを。だからこそ、いつも当たり前のことに感謝して過ごそうと心がけていた。友達を大切にして、恋人を愛して、家族に感謝して過ごすように努めていた。しかし、最後には別れが辛いからと、友達や恋人とは別れる道を選んだ。

そして茉莉は気づいた。体が病にむしばまれていく中で、人にやさしくすること、人を気遣うこと、人を許すこと、そんな当たり前のことすらできなくなっていくことに。体が壊れると心まで壊れてしまうと知った。だから茉莉は納得できた。やはり自分にはこの生き方しかなかったのだと。色も影も失ってやつれた自分が心ない言葉で周りを傷つけるのを想像すると、別れて正解だったのだと茉莉は思った。なにげない日常にある幸せを当たり前と思いはじめれば人はつい傲慢になってしまうけれど、その小さな幸せの一つ一つを感じ、大切にしながら生きていくことができたというのは、十分価値のある、余命十年だからこそできた生き方だと私は思う。

「死ぬ準備はできた。だからあとは精一杯生きてみるよ。」

もがき苦しみながらも、精一杯生きたこと。それが茉莉の生きた意味であり、そこには計り知れない価値がある。

私も精一杯生きよう。いつ終わりが来るかわからないけれど、思い描いたものとは違う人生になるかもしれないけれど、自分の道を歩こう。たとえそれが周りと違っていても、不安に思う必要はないのだ。この本で茉莉と出会って、人と比べて落ち込んでばかりだった私は、自分の道で堂々と生きていく勇気を学んだ。

「生きる意味」も、「人生の価値」も、考える必要はない。それは人が精一杯生きたとき、はじめて形になるものなのだから。

指導室　☎(5654)8573